

第 1 回 茅ヶ崎市市民活動推進委員会 会議録

議題	(1) 平成 29 年度実施 協働推進事業 実施報告会 (2) 平成 29 年度実施 市民活動げんき基金補助事業実施報告会
日時	平成 30 年 6 月 3 日 (日) 9 時 00 分から 17 時 10 分
場所	市役所本庁舎 4 階会議室 2 ～ 5
出席者氏名	草野正弘 椎野典子 秦野拓也 伊藤隆 大江守之 中川久美子 水島修一 三觜健一 事務局 5 名 (市民自治推進課) 石井協働推進担当課長 前田課長補佐 遠藤副主査 小坂主任 勝山主事
欠席者	西野義一 森祐一郎 北川哲也 高橋準治 石田貴一
会議の公開・非公開	公開
傍聴者数	延べ 90 名

げんき基金Bグループ発表

○事務局

それでは、最初の団体、どんぐりさんの木育ひろばさんからご発表のほうをいただきますと思います。7分間で発表していただければと思います。よろしくお願いします。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

代表の片山です。よろしくお願いします。

この1年間、大変忙しく、大変充実して、大変心地いい活動ができました。忙しいと感じたのは、今まで、2011年から始めて、呼ばれて行ったり、出向いて行ったりと、いろいろな場所でできたんですけれども、今度、定点にしたということで、自分で広報の活動をしたり、その運びをしなければいけないということで、広報をするのが初めてだったのが大変でした。ただ、同じ場所でできたということで、荷物の搬入とか、後片付けとか、とても緩やかにできました。そこで、人数も少なく、ここに来たお母さんたちが、ああ、心地よかったわと帰ってもらえるひとときを提供できたと思います。

最初に会場づくりとあって、皆さんが来る前に、フラフープの中にいろいろなおもちゃをセッティングしました。最初にいつも来ていただいた方に注意事項を申し上げますけれども、フラフープに入れるというのは、2つで一つになったおもちゃがバラバラになったら、ほかのお友達が遊びづらくなるということで、お母様方に、遊んだものをなるべくそこに置いてもらうようにしました。

それから、お子様がなめたものに関しては、きちんと拭いて戻しておいてくださいということをコンセプトに進めました。ほかにもいろいろな注意事項がありましたけれども、その2つはとても大事なことでした。

向こう側に、ああいうおもちゃで、手前側はプルトイと言って、紐で引っ張って遊ぶ、座って遊ぶものと、動いて遊ぶものと分けさせていただきました。その後、自由に、来た人からどんどん遊んでいただきます。物が置いてあると、「これから、はい、一緒にスタートしましょう」ということはできませんので、「どうぞ遊んでください」という形で、遊んでいただきました。子どもはおもちゃのほうに目がいきますので、お母さんやお父様から離れて、どんどん遊び出します。

5回、木育をやって、1回がコンサートだったんですけれども、皆勤賞の方が1人いらっしゃいました。コンサートは午後でしたので、自分の子が昼寝になりますからと、自分に合わさなくて、お子様に合わせて、それだけは参加しなかったんですけれども、5回、皆勤賞の方がいました。

4～5カ月の赤ちゃんを連れて、東京の四谷にあるおもちゃ美術館本館のところに遊びに行かれていますお父様とお父様がいて、初めてのお子さんで、とても大事にされていて、こんな近くにあったのなら、あんな大変な思いをして東京まで行かなくてよかったという方が、たびたび参加してくださいました。

それで、ずっと遊んでみえまして、最後、どうやって終わろうかなと、なかなか遊びから離れるというのは難しいなと思いましたので、最後は、木のおもちゃ、木の楽器で、みんなで1曲を音楽を一緒にして、その前に童歌をしたり、また、その前におもちゃづくりをしたりするんですけども、その作業は、音を出すとそこに寄ってくるんですね。それで、みんなおもちゃの木琴も、楽器、木琴ということで、イコールということになっているので、みんなでこうやって音楽をして、じゃあ、これでおしまいですよというふうにして、スムーズに終わることができました。

お父様の参加もとても多かったんですね。きょう、資料につけさせていただいたんですけども、お父様にはこういうのを渡して、数字合わせをできますかというような、パパにはお土産を渡したりしています。

本当にスタッフさんに恵まれて、当初、2011年から一緒に活動してくださっているスタッフさんです。声かけとか、フォローとか、さりげない振る舞いがとても、お母さんに来ていただいている方に安心感を得られたと思います。

それから、きょうもいらしてくださっているんですけども、クマパパと言うんですけども、この活動を始めた中で、私が知らないうちに、おもちゃインストラクターの資格を取っていました。私はとりあえずおもちゃコンサルタントなんですけれども、しっかり学んできてくださって、そして、申し込みが午前中に殺到したときがありまして、午後は児童施設の子だけに最初したんですね。親御さんがいない子なので、一緒にするのはまずいと思ひまして、その子どもたちがとてもなついてくれたのが、温かい雰囲気というか、若い方じゃなくて、ちょっとじいちゃんぽい方だったので、とてもなついて、彼はヘトヘトになるまでつき合ってくれました。

手前にあるのが、その日にお土産に渡したもので、途中でつくるものがありますし、お水とか入っているのは、お水の中に切り刻んだテープを入れただけなんですけれども、お土産にあげたものです。

それから、横浜で逆輸入して知り合ったスタッフさんなんですけれども、きょうも来てくださってありがとうございます。会社勤めをしていらっしゃるもので、でも、たまたま土曜日だったので来てくれて、子どもの扱いが上手というか、待っていてくださる方で、あのときもこのおもちゃをつくったんです。おもちゃというか、指人形。簡単につくれるんです。それで、これで子どもにフニャフニャフニャとって遊ばれて、彼も本当に受け入れがよくて、とても助かりました。

その中で1回だけコンサートをしました。毎回、最後は童歌とか1曲やるというのも大事にしていました。そういうのも、うまい歌とか、そうじゃなくて、ママの声が大事なんだよ。ママの息とか、温かさが大事なんだよという思いがあります。でも、ちょっと上の子とか、障害児のこともありましたし、あと、この中には見えないんですけども、車椅子の重度の障害の子も参加しています。それで、体を張って遊ぼうというコンサートを、あらまきシャケ君というプロの方を呼びまして、そしてコンサートをしました。本当にい

い方を呼んだなというのは、最初から最後までつき合ってくださいました。大盛況でした。

なんでもおもちゃになるのということで、あれは洗濯機の箱に色紙を張っておいて、全然知らない子でもコミュニケーション遊びできるというのを、これはちょっと違う写真を持ってきました。当日、撮るのを忘れてしまったので。

最後に、公園に、ただおままごとを仕掛けてみました。誰とも遊んでいいですよということで、誰も大人も私も全然ついていないので。そうしたら、勝手に、全然知らない子同士が、置いてあるものは、木の実とかマツボックリとか、木の器で、そうやって子どもが、遊ばないんじゃないかと、ちょっと仕掛けてみることも必要ではないかなと思っています。遊び心は大人のほうに必要であれば、子どもも豊かに育つのではないかなと思えました。そんな1年を楽しませていただきました。

どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

それでは、質問等ありましたら、どうぞ。あるいは感想とか。

○秦野委員

お疲れさまでした。ありがとうございました。当日の様子が目に浮かぶような気がしました。木のおいとか、音とかも感じられるような、安らぎの空間があったんだと、うれしく思いました。ありがとうございました。

今回、市内の幅広い地域からの参加があったということも、報告書の中から特に読み取れたんですけども、私のほうで気になったのが、今回、サポセンの仲介もありながら、たくさんの方にボランティアに関わっていたということなんですけれども、どのようにその方々の募集を募ったのか。何か工夫された点があったのかなと思ひまして、伺わせていただければと思います。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

一度、おもちゃの清掃の日を設けたんですけども、中学生とかのボランティアには間に合わなかったもので、サポートセンターから紹介していただいた方に、終わってから、全部木のおもちゃを、湿ったというので、拭く作業をしてもらいました。たまたま、世代が10代の保育科の学生さんと、元保育園の先生をやっていた方と、現在やっている方だったので、子どものいろいろな育ちとか学びというのを話し合いながら、1人でやったら大変なんです。とても細かいんですね。なので、木馬まで全てやっていただいて助かりました。私だったら集められなかったんですけども、そこはサポートセンターの方に感謝しております。ありがとうございました。

○三觜委員

要するに木のおもちゃを、これは、1つは、つくるというのはあるのかどうか。それを使って。遊び方なんですけれども、子どもたちに、ただおもちゃを適当に遊ぶんじゃなくて、どこかの方向に引っ張るような形で何かをつくらせるのか、ただ木だけで遊ぶのか、その辺の遊び方とか、物をつくるのか、そういう部分というのはあるのでしょうか。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

今回は乳幼児を持つ保護者の方が対象だったので、つくるというのは、子どもたち自身はつくらないで、保護者の方につくってもらおうということはありません。あと、遊び方というのは大人が決めたことなので、その子が自由に遊べば、全然。自分で考えて、自分で行動に移す、動かすということが、おもちゃ自体の問題よりも、そっちが大事だと思っています。ただ、これとこれでセットで、こうやったら、こんなマジックみたいなんだよということは、とりあえず説明します。でも、それは……。

○三觜委員

物があって、それを子どもたちが自由に使ってどういうふうにするかというのは、子どもたちの想像力と、子どもたち任せということですね。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

そうですね。乳幼児なので。ただ、それが簡単なことでも、それは一つ一つが成長なんです。そこに載せること、転がること、喜ぶこと、全てそれは成長なので、それを大人の方に、親御さんたちに見守ってほしい。簡単なことだと思うんですけども、それは成長しているんだよという場を提供しているつもりでいます。

○三觜委員

わかりました。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

ありがとうございます。

○伊藤委員

23ページの下から2番目に、今後の展開の2つ目の段落ですけれども、「パルシステム」とお書きになっているんですけども、「パルシステム」というのは何ですか。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

共同購入みたいな、生活クラブとか、いろいろな団体さんがあると思うんですけども、パルシステムさんは共同購入の一つの企業さんなんですけれども、そこからそういう

ご依頼があったので、そこで。

○伊藤委員

パルシステムのどなたかが見学されていたんですか。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

見学に来ましたけれども、その前に市のほうでも何かやられているのだと思うんですけど、その関係で私のほうに見学に来られまして、うちのほうでもそういうことをやりたいと思っているんですけれども、どうやったらいいんですか、アドバイスをくださいということなので、それは3月に協力する形にしました。それは全部私のボランティアでやりました。終了してしまいました。

○伊藤委員

ということは、当日、協力をされて、「今後の展開」の中にお書きになっているので、今後の展開というのは、次年度から。ちょっとよくわからないんですけども。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

パルシステムさんとは、その1回限りと私のほうは思っています。相手が企業さんなので。次年度からは、その方が担当を外れたというのもありまして、関わりは多分持てなくなります。次年度からは、平塚のNPO団体さんのほうからオファーがありまして、そこで協力するつもりでいます。次年度内ではなくて3月内に行ってしまいました。今年度内ということですね。申しわけありません。これを出すのが早かったんだと思うんですけども、すいません。

○伊藤委員

要は、今後の展開をどの部分をお考えなのかなというのがよくわからなかったの。要は、スタートアップ支援なので、今後をどういうふうにお考えになっているかをお聞きしたいので。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

下の部分なんですけれども、外部からの今回の事業でやってほしいという利用者さんの声があったということで、公民館で開催が決まっています。公民館に何うことになっています。それから、平塚のNPO団体からもオファーがありました。見学に来られて、協力してほしいということもありました。それは外からのことで、私としては、今回の、本当は障害児の方も一緒に遊んでほしかったんですけども、それがなかなか結びつかなかったもので、私たちからそういう団体に出向いていくということと、あと、重度で家庭で

生活しているところの遊び支援、遊びお届けみたいなのをしたいなと思っています。それは養護学校のほうともお話をさせていただいてあります。

○中川副委員長

ありがとうございました。

○事務局

それでは、どんぐりさんの木育ひろばさんよりご報告いただきました。ありがとうございました。

○片山（どんぐりさんの木育ひろば）

ありがとうございました。（拍手）

○事務局

それでは、次、子ども未来塾さん、ご準備お願いいたします。

○中川副委員長

では、子ども未来塾さん、「地域で育てる地域の子ども」ということで発表をお願いします。

○長谷川（子ども未来塾）

よろしく願いいたします。

まずはじめに、おかげさまで元気基金のほうで有効利用させていただきまして、教材等をいろいろ買うことができました。お礼申し上げます。ありがとうございます。

では、ただいまより、子ども未来塾の報告を始めさせていただきます。

地域で育てる地域の子ども。確かに昔は地域の方々がそれぞれ声をかけながら、地域の子どもたちを育てていたなという、自分自身にも実感があるんですけども、このところ、なかなかそういうものが見受けられなくなってきたなと感じております。ところが、自治会等で夏まつりとかで、子どもたちがもう一度地域に戻る、そんな様子もうかがえるようになったなと考えております。私どもはそれを学習支援という形でやろうといたしました。

子ども未来塾の成り立ちです。

大雑把にしか書いてございませぬけれども、まず、地域の子どもを教えるところから始めようということを考えました。そして、まずは小学生です。今、小さいお子さんのおもちゃのお話とかありましたけれども、今度は小学生に絞ってみました。これは理由もいろいろあるんですけども、長くなってしまうので、後ほどご質問があればというこ

とで。

家庭学習の習慣をつけさせたいと考えておりました。私自身は中学の教員をやっております、そのときに、中学生というのは学習習慣、昔の子のほうが随分ついていた。現在の子というのは、本当にそういう意味では学習習慣は身につけていないなという実感がございました。

全国学力学習状況調査の結果の中にもそれはあらわれてきています。小学生、中学生、両方とも学習状況調査をやりませけれども、家庭学習の習慣というのはなかなか身につけていない。この中でターゲットを絞って小学生ということにいたしました。

私自身は小学生を教えたことはございませんが、連れ合いのほうが小学校の教員でしたので、そこにアドバイスをもらいながら、まず小学生からしっかりと家庭学習の習慣を身につけさせたい。そして、そこで地域として学習支援を行おうということを考えました。その学習習慣を身につける機会を提供しようということで、子ども未来塾を始めることにいたしました。

最初は、3年ほど前になるんですけれども、下赤寺子屋ということを始めまして、最初、自宅に2人呼びまして、やりたいということでお勉強し始めて、2人が4人、4人が5人、5人が8人となってきましたので、そろそろいいだろうということで、新しく「子ども未来塾」ということで場所を移して行くことになりました。

最初は2人から、8人にふえたということですね。地域に発信いたしまして参加者を募り、子ども未来塾として発足いたしました。

さあ、勉強しようということですが、場所のほうです。場所は下赤の自治会館。時間、毎週水曜日の午後3時半から2時間と、土曜日の午前9時半から2時間です。

子どもたちには先に心得みたいなものを配りまして、社会性じゃないですけれども、ご挨拶のところから言葉遣いのところからということをきちんとやらなければいけない。なあなあではやりたくないなと思ひまして、そういうものを配りながら、保護者の方にも協力をいただきながら始めましたところ、元気な挨拶ができる子が大勢いまして、ほめるところから始めることができました。

そして、集中力という点では、低学年でも30分ぐらい続くんです。驚いたんですけれども。普段だと1年生だったら大体10分か15分ぐらいで無理だと思うんですが、大体30分から40分ぐらいは、シーンとやっています。それが過ぎたぐらいから少し動きがでてきて、じゃ、水筒のお水飲んでいいよとか、休憩しなさいなんてお話をしてやっています。

今、こちらのほうを見つめている子もいますけれども。ちょっと飽きたところですが、でも、この子はすごくよくお勉強します。

次です。それ以外に、夏休みに入ったとたんですけれども、1週間の中で5日間、宿題を中心にお勉強する時間をつくろうということで、昨年度、7月24日の月曜日から28日の金曜まで実施いたしました。そのときの風景です。宿題を中心に5日間参加した子がいました。大半は、低学年ですと宿題のほうは終わってしまいすね。と、もちろんお母さん

は笑顔です。なぜか。「宿題やりなさい」を言わないで済むからということで。お母さん方ともまたいろいろなお話をしながらやってまいりましたけれども、そこで教育相談等も入りまして、子どもをより深く知ることができましたし、また、学校の実情みたいなものも見えてくる。そういうことがありました。

そして、これは1コマですけれども、教えっこですね。だんだん仲よくなってきますと、どうやってやるのと、わからなかったりすると、こうやって教えっこが始まります。これは男女なんですけれども、なかなか仲がいいですね。同学年の子です。人に教えることで理解が進みます。こんな光景が見られるようになってきましたということです。

最後に、帰る子どもたちとお掃除をやります。こんな小さい子が一生懸命はいて、私はほうきをやる、何をやるなんて取り合いしながらやっています。こんな形で消しゴムのかすがたくさん出たりしています。

そして、これが今年度の活動の様子です。たまたま写真を撮りました。土曜日のことなんですけれども、このとき、20人ほど集まりました。大学生のお手伝いの子が来てくれたりとかしながら、こうやってやっておるところです。

もう時間がありません。最後、「地域で育てる地域の子ども」ということで、子どもは未来そのものです。子どもは親だけで育てていくものではありません。多くの人々と出会いながら、多くの経験を積み、大人になっていきます。子どもをないがしろにすることは、未来をないがしろにすること。これは私の考えでもあります。子どもを大切にすることは、未来を大切にすること。私たち大人は、子どもと関わり合いながら生きていく必要があるのではないのでしょうか。できるところから始めたいな。学習の支援はさほど難しくありません。でも、二の足を踏む方が多いです。人生の一部を誰かのために、子どものために生かしてみませんか。人の役に立つ、自分を必要としてくれる、こんなうれしいことはありません。そういった充実感の中で行っております。

ちょっと時間を過ぎました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○中川副委員長

ありがとうございました。それでは、質問や感想を。

○秦野委員

ありがとうございました。報告書とスライドを拝見しまして、互いに教え合う教えっこですとか、お母さんたちの教育相談なども行っているということで、僕も学習支援の意義のプラスアルファの部分も感じる報告だったなと思いました。

1点気になっていたのが、今回、うまくいっている様子を感じたんですけれども、何がうまくいっている要因になっているのかなと思ひまして。それは学習支援者なのか、愛情や空間がいいのか、はたまた曜日の設定がいいか、または何かほかの要因があるのか、今、1年間活動されてみて感じていることがあれば教えてください。

○長谷川（子ども未来塾）

まず、場所がよかったなと思います。椅子でやっておりますので。私の家でやっていたときには、下に座るような形だったんですね。そうすると、どうしても子どもたち、姿勢が悪くなったり、いろいろしちゃうので、そのときに「姿勢悪いよ」ということまで言わなければならなかったんですが、椅子でやらせると全然違います。

それからあと、気温とか気候には左右されますね。寒い冬の時期は3人ということもありました。そのかわり、じっくり見てやれるので、それはそれで子どもたちは喜んで帰りました。

と同時に、そういうようなお話を親御さん同士で情報交換して、今またどんどんふえつつあります。ただ、そうすると、今度は会場が手狭になってくるので、いい会場がないかなと考えているんですけども。ただ、空き家云々でしたら、座ってしまうこととなりますので、椅子では無理だろうということで、センターみたいなものがあればありがたいなと考えています。

あと、曜日のほうはいろいろ考えて、一番多く集まる曜日をということで試行錯誤しながら、水曜日と土曜日にいたしました。

以上です。

○中川副委員長

ありがとうございます。

私もちょっと聞きたいんですけども、登録制みたいな形で参加の小学生が56人と書いていらっしゃるんですけども、これはどうやって募集したりとか、あるいは学校の連携とか、どんなふうか。

○長谷川（子ども未来塾）

まずは、学校には支援を求めませんでした。とにかく私自身が学校の出身ですから、変にどんどん学校にいろいろこうしてください、ああしてくださいということで、それだけ学校に負担をかけることとなりますから、これは地域は地域でやるものだと思っております。ですから、それはやりませんでした。

それからあと、私は自治会のほうにも入っております、副会長をやっておりました関係で、自治会長さんのほうも協力していただきましてこれを立ち上げたんですけども、まずは回覧。これが一番でしたね。その次は親御さんの口コミです。いまだにふえているのはそれなんです。徐々に広がりまして、下赤だけではなくて、今、高田、室田、香川、あと、甘沼がありましたか。の子どもたちが通ってきています。小学校としては4校ほどですね。一番多いのは室田小学校ですけども、それ以外には、松林小学校、鶴が台小学校、香川小学校という形になります。

以上です。

○伊藤委員

公金を使っているの、細かいことで恐縮なんです、39ページの収支決算を見ますと、決算額がちょうど収入と見合っていて、冷暖房費が、会場費が、当初予算が5,588円となっていて、決算と1万とぴったりで合うことと、一方、決算はわりと細かい数字が、物品費が何らかの形で調整されているんだと思うんですけども、これはどこでどういうふうなお金の割り振りをしているんですか。というのが1つと。事実関係です。

2つ目が、私は不勉強なんですけれども、「採点ペン」という言葉が何度か出てきています。採点ペンというのは何か特殊なんです。2つ事実関係です。

○長谷川（子ども未来塾）

わかりました。まず、寄附金収入。これは正直言いまして、私たち夫婦で2万円出しています。それは、今までも教科書を買ったりするのに使っておりましたから、それで出しておきまして、会場費の1万円は、最初は石油ストーブの予定だったんです。ところが、自治会のエアコンがその前に壊れまして、新しくエアコンを買いかえたんです。それが今度は、前は冷房だけだったんですけども、冷暖房完備になっちゃった。そうすると、その分、灯油代がかかりませんので、じゃ、逆に、夏にも使ったり、冬にも使ったりするので、冷暖房費ということで自治会のほうに1万円お渡ししたという実情でございます。

○長谷川（子ども未来塾）

一緒にやっている長谷川と申します。

これに関しては、会場費に関しては、本当は1万円ではちょっと足りないくらい冷暖房を使わせて、電気を使わせていただいているんですが、これに関しては自治会のご好意で、当初5,000円を出していたのが、12万というのにぴったり入れるために入れたんですが、それでは本当に足りないんじゃないかというのは考えていまして、ただ、自治会のご好意があって、今回は1万円、会場費を出ささせていただきました。

それから、採点ペンの話なんです、実は小学校の先生方が使っている採点ペンというのがあるんです。それは非常に使いやすいペンでして、子どもたちはそれを使うと喜ぶんです。それもあって、私が実は仕事をしている最中に使ったペンを使うと喜んで、それならば、とりあえず3人が中心にやっいまして、3人とも持っていれば、みんなで回しっこすれば、採点ペンがやるんじゃないか。相変わらず子どもたちは喜んで、あ、先生と同じだと喜んでくれて、ちょっと使ってみようかと。

○伊藤委員

本質的なことじゃないので。1つだけ内容でお聞きしたいことがあるんですけども、

この試みは、中学校の先生だったということなんですけれども、小学校で今後拡大していくべきだと思いますか。

○長谷川（子ども未来塾）

地域でやっていただきたいな。そのノウハウは私たちが教えながら、ぜひいろいろな地域でやってほしいなと思っています。

○伊藤委員

そのノウハウは、提供するすべとか、段取りはお考え。

○長谷川（子ども未来塾）

まだこれからです。

○伊藤委員

わかりました。

○中川副委員長

ありがとうございました。

では、時間がきましたので、ありがとうございました。

○長谷川（子ども未来塾）

どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

ミナスタさんから発表を頂戴します。

では、ミナスタさんからサッカー教室についてご報告いただきます。

○三浦

まず、改めまして、こんにちは。ミナスタサッカー運動教室の三浦です。このたびは、げんき基金によってスタート支援のほうをしていただき、自分の中ではいいスタートが切れたのかなと考えております。

まず、実施報告なんですけれども、こちらのほうは、当初3つの園を対象にやる予定だったのが、1年目で7つの園と関わることができました。回数の方も36回を予定していたんですけれども、園長先生のほうから、もう少しできたらうれしいということで、回数が45回にふえました。関わった人数が384名という形でやらせていただきました。サッカーを通して体を動かすのが好きになってもらうのと、あきらめない気持ちであったり、

頑張る気持ちを覚えてくれれば一番うれしいなと思い、選択肢の一つとしてサッカー運動教室という形で関わらせていただきました。

親子ふれあいサッカー教室は、ミナスタの思い。例えば、さっきお話ししたとおり、体を動かすのが好きとか、楽しかったとか、あきらめないで頑張ること、どの分野でも同じだと考えています。それなので、そういうことを保護者の方たちにも、サッカーすればいいだけではなく、サッカーを通して学んでもらいたいという気持ちを伝えながら、サッカーを終わった後に話させていただきました。

実施場所とか時刻は、園によって違うので、冊子を見ていただければと思います。

僕だけの一言語で、子どもたちが「できた」とか「楽しかった」と思うより、先ほど茶封筒で持っていったアンケートの保護者の言葉などを見ていただくのが一番の事業の成果なのかなと感じています。あと、委員さんにお渡しした署名の集計が出ていますので、確認していただければと思います。署名の中で、言葉をもらう欄もあったんですけども、それは、茶封筒に入っていた先ほどの署名のほうを見ていただければと思います。

中でも問題点が何個かあって、なんでサッカーなの？とか、スケジュールがわからないよという言葉もいただいたりしました。それなので、今後は、スケジュールなどの透明性を図るために、ステップアップ支援としてホームページの作成を今取り組んでいます。今後たくさん子どもたちに体を動かすことを好きになってもらう、あきらめず頑張ることなどを覚えていただければ、どの分野でも通用すると思いますので、楽しみながら頑張る習慣を身につけていてくれればなと願うばかりです。

○中川副委員長

ありがとうございました。どうぞ。

○三觜委員

これを見ますと、かなりの回数をこなされているようにお見受けするんですけども、1つは、お1人でやられているのか。

○三浦

そうです。

○三觜委員

ですよ。今、スタッフどうなのかなとお聞きしようと思ったんですけども、結構目いっぱい形じゃないかなと思われるのと、もう一つ、子どもたち、園児については、スポーツのきっかけづくりということだけなのか、アンケートの中身をよく見ていないからあれなんですけれども、成果の報告みたいなのが、少しスポーツをやった結果、子どもたちが元気になったとか、仲間がふえたとか、そういう結果が出ているのかどうか、その

辺がわかれば教えていただければ。

○三浦

アンケートをとらせていただいたところで、楽しみにしているというのは、好きで関わってくれているということなので、それが大きな成果だと感じています。

○三髯委員

1人は大丈夫ですか。

○三浦

ありがたいことに、時間がわりとつくれるという部分がありまして、そういう部分では僕も楽しみながらやらせていただいています。

○三髯委員

例えば、せっかく各園で動き始めたのに、オーバーワークになってできなくなっちゃったとか、お1人だと、最悪、そういうケースも心配しなければいけないのかな、みたいな余計なあれもありますので、その辺を、仲間をつくるとか、7園で継続してやられていくとしたら、ご本人も少し時間をとりながら継続していくような方向は考えられたほうがいいんじゃないかなという気がしました。

○三浦

わかりました。ありがとうございます。

○伊藤委員

この事業自体は、すごく懸命にされて、有意義だと思うんですけども、ちょっと離れますが、最近、スポーツ、相撲であるとか、レスリングであるとか、柔道、そして最近アメフトのように、いわゆるコンタクトスポーツがいろいろと問題を起こしていますね。サッカーはコンタクトスポーツと言えるかどうか。ただ、アメフトも出てきて、ちょっと近いので、そういったことに対する親たちの反応、子たちの反応、あるいは三浦さんのお考え。昔はあまりなかった話なんだと思うんですね。どうお考えでしょうか。

○三浦

今やっている現状のサッカー運動教室は、あまりコンタクトしないようにつくってありまして、対決するというのもほぼほぼない。対決するとしたら、僕と子どもたちという形でやっているのです、そこら辺の。

○伊藤委員

あまり関係がないと。

○三浦

正直思っています。

○伊藤委員

そういった社会の風潮に対して、スポーツに対する若干の風当たりが強くなっていると思うんですが、ミナスタは全く影響を受けていない。

○三浦

はい。受けていません。

○秦野委員

ありがとうございました。私、浜見平保育園の教室をやっていたときに拝見させていただいて、本当に子どもたちも楽しそうだなと感じました。少し三觜委員とも重なるんですけども、今後、教室が月、6保育園で12カ月だから、年間72回活動されるということなので、おそらく保育園の調整業務だったりとか、当日も72回教室をこなすということはもちろんあると思うので、ぜひメンバーを、仲間をふやしながらやっていただきたいなと思います。そのときにどんな方がいいとか、どんな方が今必要だなというイメージをお持ちだったりしますか。

○三浦

自分がスーパーだとは思わないんですけども、しっかり子どもたちの表情を見て判断できる人がいてくれたらいいなと感じています。

○秦野委員

ありがとうございます。ぜひ、これから募集をするときは、いろいろな形で多分告知をされると思うんですね。ご自身でお会いになって、「仲間になろうよ」と言ってなっていく場合もあれば、もしかしたらホームページを作成されたり、いろいろな支援者さん、支援企業さんにもお声がけをしながら進めると思うので、どんな方と一緒に組めていくといいのかというのもご自身で整理をされたり、文字に起こしたりしながら進めていかれるといいなと思いました。

○三浦

了解しました。ありがとうございます。

○中川副委員長

将来的にはステップアップをもう受けていらっしゃるんですよね。今年度は。

○三浦

はい。

○中川副委員長

その中でお仲間をふやすという方向で組み立てていらっしゃるということですよね。

○三浦

はい。

○中川副委員長

何か反応はありました。

○三浦

まだ全然ないですね。ホームページもまだ作成中で。もちろん、人件費とか、そういう部分で一切、今回の事業は七十何回、今年度は45回やっても、人件費にかかっている金額はたったの3日間。親子ふれあいサッカーのときのアシスタントだけであって、あとは全部無償でやっている状態で、今年度も、すいません、さっき7園と言ったんですけども、8園に新しくまた1つの保育園がふえまして、香川保育園がふえて8園になって、保育園に出向いてやる事業は一切の人件費なしに、自分が一緒に楽しみながらやっているという形になっていますので、そういうところもうまく仲間を巻き込めるようにつくっていきいたいと考えています。

○中川副委員長

わかりました。時間がきましたので、ありがとうございました。

○三浦

ありがとうございます。（拍手）

○事務局

それでは、30分まで休憩だったんですけども、少し時間が押していますので、35分程度まで休憩とさせていただきますと思います。

(休 憩)

○事務局

それでは、ちょっと早いんですが、再開させていただきたいと思います。

地域のお茶の間研究所さろんどてさんより「ほんそん子ども食堂『いただきます』思春期カフェ」についてご報告をいただきます。よろしくお願いします。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

地域のお茶の間研究所さろんどての代表をしております早川と申します。よろしくお願いいたします。

ステップアップ支援の3回目ということで、これが最後で、前回2回は傾聴講座でいただいたんですけども、今回は新しく子ども食堂を2年前から開催してまして、そこに集まってきた子どもや、また、スタッフの中でも課題とかがありましたので、この事業をプレゼンさせていただきまして、実施をいたしました。

ここで「何のために」というところを押さえておきたいんですけども、この事業の目的は、思春期の特徴を学び、親の支え合いの仕組みをつくりたい。少なからず、この時期の子どもを抱えている親は、みんな何かしら悩んでいるのではないか。そして、親が子どもを支えたくても、親自身が元気になれる仕組みがない。そうしたらつくろう。私たち、「さいとうさんち」とか「プレママと赤ちゃんの日」など、居場所をつくってまいりましたので、この年代の保護者の居場所をつくりたいなと思って、この事業をいたしました。

当初の計画、こんなふうに「学びの会」と、あとに出てくる「シェア会」と、4回の学習と6回のシェア会ということで考えていました。190人の参加を4回の「学びの回」で考えていました。

実際に実施した内容は、少し講師が変わっております。第1回目の土井先生、第2回目の宗籙先生までは同じですけども、3回目は北村年子さん、そして、4回目、長野佳子さんということで、若干変更をしております。

4回の参加者は、第1回目は84人、2回目は14人、3回目は40人、4回目11人で、計149人、約150名の人たちが来てくださいました。

チラシは、ここにある土井先生のがあるんですけども、あと、88ページから91ページのほうに、これと同じパターンでチラシをつくりまして、1回来た人は、またこの次あるんだなということを、目のつきやすいような形をとらせていただきました。

少ないところもあるんですけども、14、11ということで、当初の計画は30人でしたので、このところは夏休みとか春休みだったりとかで、日程の設定がこちらのほうで難しかったのかな。集まりにくい日程の設定になってしまったなと思っています。そのかわり、2回目、3回目のところは少ないなりにワークショップ形式で行うことができまして、より深い学びとなったと感じております。

今回は6回の「シェア会」のほうですね。居場所のほうです。当初の計画として6回、1回100円の参加費をいただいて、お茶とお菓子を食べながら、ゆったりとした気持ちで話しやすいカフェ形式にしたいということ。それから、土曜日の午後の開催で、働いている保護者の方にも参加しやすい曜日の設定をしました。子ども食堂をやっている教会をお借りして開催をいたしました。

「シェア会」6回、「学びの会」がない月に開催をしていきました。当初、計画が15人だったんですけども、出っこみ引っ込みありながら、6人から15人までということで、その回でそれぞれですけども、参加者がありました。

アドバイザーを、なるべくここには専門家を呼びたいなということで計画をしまして、第1回目と第6のところはアドバイザーを準備ができませんでしたが、参加スタッフの関係者からフリースクールの学園長や、フリースクールで学んだ経験者や、ホームスクールといって学校に通っていない方の参加がありまして、学校でないところでの学びについても共有をすることができました。

この間1年間やってきたことでわかったことということで、困ったときに相談するところが少ないというふうに、当初プレゼンしたときにもお話ししたんですが、乳児期のお子さんや、学校に行く前までの相談窓口はとて多いんですけども、子どもが育った中学校以上になってくると、なかなか相談するところが少ないということがあったと思います。実際、困っている方が多かったなと思います。

あと、相談する相手がないということで、かなり深刻な問題に思春期になってくるとあるのかなと思っています。あと、不登校になったりとか、ひきこもってしまうと、なかなか相談を気軽に近くの人に言えないというところが「シェア会」の中で声が上がっています。

あと、不登校になってしまったりとか、ひきこもった場合、どうしていいかわからない。その情報が圧倒的に少なくて、どんどん不安感がふえていってしまっているということがわかりました。「シェア会」には、経験者や同じ悩みを抱えている人がたくさん来ていただいたので、そのお話を聞くとほっとするという材料になっているかなと思います。定期的に会うことで、また自分をリセットして次に向かうことができるということで、毎月行ったことはよかつかなと思っています。

「思春期カフェ」の今後ですけども、毎月1回のカフェは継続で、「学びの会」も年数回の開催をしていこうと思っています。新しいところでは、子ども食堂の時間を利用して、これは8時になっているんですけども、7時まで。2時から7時までは、そこで「行き場所のない」という声もいっぱいいただきましたので、子どもや若者の居場所も同時にしていこうかなと考えています。

以上です。

○中川副委員長

ありがとうございました。

随分いろいろなメニューを次から次へと提案されて。でも、すごいニーズに合っていると思うんですけども、ご質問があれば。

○三觜委員

新規のという、ある特定の時期に限定されてやられているのは非常にいいと思うんですけども、参加募集をされるきっかけというか、ご本人なのか、例えば、親御さんが、うちの娘を連れて行こうというような形の参加になるのか、その辺の仕分け。ご本人が来られるわけですよね。「シェア会」のほうは。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

いえいえ、一番最初に目的でお話ししたように、保護者と支援者の会なので。

○三觜委員

両方で参加される。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

いえいえ、保護者と、当事者のお子さんを支援する。

○三觜委員

要するに、その会に来られる。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

お子さんはいらっしゃいません。

○三觜委員

保護者の方だけ。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

保護者と、保護者とかお子さんを支援している人たちですね。

○三觜委員

わかりました。

○伊藤委員

チラシを見ていて、89ページに「思春期カフェ」参加費100円と括弧書きで書いてある

んですが、これというのは、「シェア会」というのは全部100円で、講演会が500円という。これはどういう。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

講演会のほうは講師をお呼びするので、講師のところにも少し、講師代も全部この基金を利用するだけではなく、来た人にも負担していただくというところと、あと、資料もありましたので、資料代というところでしょうかね。

○伊藤委員

「シェア会」は100円。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

「シェア会」は100円なので、お茶代だけですね。

○伊藤委員

それは、設定はどういうふうなお考えですか。要するに、ただにしてもいいような値段ですよ。ある意味では。あるいは、もっと安くても、もっと高くても、あまり予算的には変わらないと思いますけれども、どういったお考えで100円と。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

気軽に参加してほしいかなというところがありますので、100円。

○伊藤委員

無料よりはいい。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

そうですね。参加意識も欲しいかなというところもありますし。

○伊藤委員

わかりました。

それから、会場写真がないので、ホーリネスというプロテスタントの教会は1国の近くみたいなんですが、どういった会場なんですか。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

というのは、今回「シェア会」、あまり撮れなくて。プライベートな会だったので、ないんですけれども、集会室があります。テーブルが4つありまして、一遍に40人ぐらい

入れるところなんですね。

○伊藤委員

テーブルを囲む形のテーブル。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

はい。なので、テーブルをくっつけてまして、テーブルをぐるっと囲む形で「シェア会」をしてまいりました。

○伊藤委員

こういう感じ。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

もっとギュッと詰まって。

○伊藤委員

いわゆる教会の教室形式ではなくて。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

違います。

○伊藤委員

ロの字、コの字。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

そうですね。教会の隣に、会堂は別で、集会室のほうでさせていただきました。

○伊藤委員

私、ちょっと気になったんですけれども、最近、「シェア」という言葉をわりといろいろな方がお使いになっている。わからない人にはわからないと思うんですけれども、なんで「シェア」という言葉をお使いになったのでしょうか。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

気持ちをシェアしたいというところですね。ごめんなさい。それぐらい。共有したい。共有の会というよりは、シェアのほうか。

○（地域のお茶の間研究所さろんどて）

ちょっと自分も言いたいという思いがいろいろある方もいて、それを受けとめてほしい。そういうニュアンスをシェアする、分かち合うというところなんですけれども。

○伊藤委員

カフェとか、さろんどてとか、いろいろな観念的な言葉がたくさんある事業の周辺だと思うんです。そこにさらに「シェア」と設けるのは、ちょっと冒険かなという感じがして、イメージがすごくわきにくい。私は少なくとも。

○（地域のお茶の間研究所さろんどて）

分かち合い会みたいな感じなんですけれども、固くなっちゃいますでしょう。分かち合いとか言うと。

○伊藤委員

要するに、思春期カフェ、居場所、教団、それでシェアという、何かすごく観念的に操作しないとわかりにくいので、もう少しシンプルな感じのほうがいいんじゃないかなと思ったんです。

○（地域のお茶の間研究所さろんどて）

言葉に引っかかってしまうということですよ。

○伊藤委員

そうですね。同じ方が、宗籐さんがずっと講師をされているのが、一緒にチラシで出ているということでもって、そこをちょっと、どういう全体的な設定なのか。我々は一応お聞きしているので、全体構図がわかるんですけれども、初めて参入する人にはちょっとハードルが高いような気がする。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

チラシがわかりにくいということですか。

○伊藤委員

そうですね。僕は89ページのチラシを見て、どこが違うのかなというふうに思ったんです。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

シェア会と学ぶところがわかりにくいということですね。

○伊藤委員

はい、そうですね。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

そうですね。ここをわざわざ一緒にしたのは、学びをすると、そこに講師のお話を聞いてみようと来た人たちが、学びの会だけで去ってしまうとか、分かれてしまうので、次はもうちょっと聞き足りないところは深めたいという意味でこれを載つけたんですけれども、そこがわかりにくいということですよ。

○伊藤委員

最近、子ども食堂とかいろいろなものがあちこちで、皆さんやっている方はわかっていると思うんですけども、例えば、ここにも「居場所」という言葉が入って、ちょっと離れた人にはハードルが高いような気がするんですね。

○中川副委員長

ちょっといいですか。時間になっちゃったんですけども、講演会に来たりする中で、物すごく深刻な問題を抱えている方もいらっしゃると思うんですよ。それを次のステップにつなげるということは重要だと思うんですけども、その辺の工夫で、1つはショア会みたいなものやっぺらっぺらというんですよ。

○早川（地域のお茶の間研究所さろんどて）

そうです。

○中川副委員長

それをキャッチするタイミングとか、関わり方とか、それは大事だと思いますけれどもね。

ありがとうございました。これで時間があれですね。

○事務局

ありがとうございました。（拍手）

それでは、続きまして、ちがさき開智舎さんからご発表いただきたいと思います。

そうしましたら、ちがさき開智舎様より「子どもに関する6%の打破ーのびしろを探せー」事業についてご発表いただきます。よろしく願いいたします。

○井上（ちがさき開智舎）

ちがさき開智舎でございます。昨年度は、立ち上げ資金を応援いただきまして、ありがとうございました。最低限の機材をそろえることができました。2年目を迎えているという状況でございます。

昨年、スタート時点では、仰々しく6%云々ということを掲げました。これは、半ば、公然の秘密なんです、いわゆる教育現場における落ちこぼれの事実。これは、学校の規模や置かれた場所によっても変わるんですけども、大体1桁から2桁弱ということが現状のようであります。

そういう中で、のびしろクラブは、香川小学校の近場でございます。香川は、市内では一番のマンモス校ですから、そういう意味では、失礼な言い方なんでしょうけども、落ちこぼれの数も半端じゃないというような現実を抱えてられるんじゃないかなということで、同志を募って、この事業を始めました。

後でお配りしました親御さんに対するアンケート、これをご覧いただくとわかるんですが、一番親御さんの関心事は、学校の宿題であるように把握しました。宿題を、それやれ、やれやれというようなことを言うことがなくなったと。それと、もう一つは、通うに従って、できたときの、正解したときの喜び、そういうものを子どもたちが家庭で話すようになってきたというような、子どもたち自身の成長、そういうものも認められるようになってきました。

昨年、登録した10名のうち、1年生が途中で1名やめました。それ以外は継続して進級しております。2名を送り出しまして、2年目のことは新たに6名入ったという状況であります。

始めたそもそもの意図が、いろいろな問題を抱えて、家庭ではなかなか勉強できない、環境にないというような子ども、いわゆる有料の塾へ行けない、通うことのできない子どもたちを主に対象としていきたいということで始めたわけです。

現在いる子どもたちは、それぞれいろいろな問題を抱えてはいるんですが、言葉は悪いんですけども、必ずしも生活困窮者の子どもたちだけではありません。しかし、有料の塾に行けていないという子どもたちを対象として活動を継続しております。

子どもたちの成長、これを支えていただいている周囲、あるいは学校、あるいは関係機関に対する報告も兼ねまして、年4回、「のびしろクラブだより」というものを発行いたしまして、それぞれにお送りし、ご理解をいただくと同時に、協力を仰いでいたというような状況でございます。非常にありがたいことに、次年度を迎えまして、地域への浸透と申しますか、開智舎に対する認知度が高まってきたというのを肌で感じるようないろいろな出来事が起こっているという状況でございます。

概略、非常に雑駁ですけども。

○中川副委員長

ありがとうございました。それでは、質問、感想に移りたいと思います。いかがでし

ようか。

これは、学校との関係というのは直接あるんですか。小学校。

○井上（ちがさき開智舎）

私の思想としまして、教育を学校だけに任せるんじゃなしに、地域の子どもですから、足らざるを補うことができれば、そういうことを地域で取り組んでいきたい。地域でサポートしていきたいと考えております。ですから、もちろん四季報は学校へも送っておりますし、それから、適時学校にお伺いして、校長あるいは教頭と先生方ですね、いろいろ情報交換というような形で訪問はさせていただいています。

ある学校の校長さんには、我々が指摘している事実は、現実と乖離しているということではなしに、そういう問題を持っている。だから、開智舎に送り込みたい子どもたちも相当数いるんですよというような、フランクなお話をいただいたこともあります。

○伊藤委員

げんき基金も、それからもう一つ、我々委員が関わっている協働事業でも、こうした子どもの学校外での教育支援、学習支援、あるいは育成支援というものがどんどんふえてきているんですね。1つ大きな問題なのは、家庭内暴力のシェルターであるとか、そういったものと同じように、プライバシーの問題。本人が知られてしまうことを嫌がって来なくなると。例えば、住所とお名前がここには書いてありますけれども、そういったことは影響なくうまくやっていけるものなんでしょうか。

○井上（ちがさき開智舎）

一番大きな問題は、おっしゃるプライバシーの問題だと考えております。いわゆる現行の法制に基づいたちがさき開智舎の、加味して、そういうものはつくってあります。そして、入塾されるときに、そのものに従った対応をしていくということで、保護者の了解、これは記名でいただいております。

○伊藤委員

この会議、この場は、議事録を含めて公開されていると思うので、この事業報告書に、地名であるとか、氏名を必ずしも書かなくてもいいんじゃないかと私は思うんですね。団体の所在地は書いていないのに、一方において事業報告書には住所が書かれているということで、そういうことから言うと、事業の大切さから考えると、いろいろな考え方がありますが、ここは省略してもいいんじゃないかなと私は思います。

○井上（ちがさき開智舎）

ありがとうございます。

○中川副委員長

どの場面で。

○伊藤委員

107ページのところです。107ページの一番うに、住所地番まで書いてあって、しかもお名前まで書いてあるので、ここは議事録に残すかどうか。それから、この報告書そのまま公開するかということを含めて、ぜひとも団体の方々、それから事務局も検討していただきたいんですが、いわゆるDVの扱いでは、よくある話ですけれども、こういったものは全部落としていって、しかも、議論する場合はオフレコにしていくということがあると思うので、そこは先ほど、正直言って、何かとかいうふうにおっしゃっていましたので、そういうことが知られると嫌な家族、あるいは本人がいると思いますので、そこを損なわないためにも、そういったことはぜひとも、この後、事務局と団体のほうで検討していただきたいと思います。

○中川副委員長

難しいところですが、お子さんたちは一般的には自治会の回覧や何かを通して募集していらっしゃるということですよ。

○井上（ちがさき開智舎）

はい。募集は、先ほどの「のびしろクラブだより」というので自治会には毎回、年4回の割で発行しておりますので、全戸配布ですので約500部ぐらい、香川の自治会、それから周辺の自治会にも一応配布しておりますので、そういう意味では、先ほどご指摘がございましたような、住所が明確になっているということも、その中で出ておりますので。

○中川副委員長

微妙なところの問題も含まれていると思いますので、その辺は慎重に扱いながら、どうぞまた継続して頑張ってくださいと思います。

○伊藤委員

誤解のないように申し上げますと、私は、公開するケースも、公開しないケースも両方あると思いますので、ただ、それぞれ事業として変わってくると思いますので、ぜひそこは検討していただきたいと思います。

○中川副委員長

ありがとうございました。

○井上（ちがさき開智舎）

ありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございます。

それでは、次に、トライさんに準備していただきます。

では、最後の事業、トライさんより「工作やスポーツなどを通じて小中学生の興味を引き出す事業」について、ご発表いただきます。よろしく願いいたします。

○亀田（トライ）

トライの亀田と申します。よろしく願いいたします。一番最後でほっとしていながらも、一番緊張する発表となりました。

まず、私どもの黄色の冊子、130ページからになります。まず最初に、スライドもつくっておるんですけれども、こちらのほうでご報告をさせていただきたいと思います。

131ページをご覧ください。上から2つ目です。事業の実施の内容ということで、木工教室、ドッジボール大会、里山公園での野外活動、電子工作教室というのを右側を書いてあります会場でそれぞれやらせていただきました。

事業の参加数としまして、延べで138。木工教室74、うち、保護者半分という形ですので、実際、小学生が37。ドッジボール大会、親子を含めまして52。電子工作、予想していた人数を下回って2名。野外活動10名という形でございました。

一昨年、スタートアップということで支援いただきまして、昨年の活動にあたっては、委員会の方とか、市長の方から、うまく広報活動をするように進めてくださいというご意見をいただきまして、それを考えながらやっておりました。きょうは、発表者は私1人ですが、ほかにも2名会員がおりまして、対応しておるんですが、ほかの団体のように10人とか20人とか大きな規模でないものですから、それぞれの住んでいる地域の周りから口コミで広げていくということで、一瞬では広がりませんが、後ほどちょっと説明させていただきますけれども、公民館の方ですとかから少しずつ広がっている感じはつかめてきております。

次に、132ページの予算のほうをお話しさせていただきたいと思います。132が決算書ですね。133にいきまして、細かい明細という形で出ております。

一番上の謝金。当初、これは、参加しない方に協力いただいた、運営だけ協力いただいた方にお支払いするという想定をしておったんですが、意外と参加の方がそのまま手伝ってくれたりとか、手伝いだけをお願いする必要がなかったものですから、予算よりも少なく済みました。

保険料という形で、活動のときに傷害保険とか、気になっておって予算立てはしてお

ったんですが、市民活動の対応でできるということがわかりまして、それも途中でなくなってから予算は組めないと思いましたので、予算として6,000円載せておりました。これが全て活動の保険で賄えるということになりましたので、6,000円が一番下にあります返金という形でお戻しさせていただきました。

物品費、こちらが12万ちょっとで、ほぼ予算どおりと。

3番目の使用料・賃借料。こちらは、会場使用料、こういった電子工作とかをやるのに外部会場を借りたときのお金。あとは里山公園の使用料という形で見ておりましたが、里山公園は2回やるかといっていたのが1回だったこともありまして、このような金額になりました。

製本印刷のほうは4万円の予算をとっていたところ、約3万弱。こちらは、我々スタッフがサポセンに直接足を運んで、自分たちで印刷したということで削減ができております。当初、なかなかみんな時間が忙しいものですから、外部の印刷業者を使ったりした場合、このぐらいかかるだろうということで、ここの差異が出ております。

先ほど、30年の取り組みということで、活動周知をちょっと考えてくださいねと。あとは、活動協力者。3人だけで回すのではなく、活動協力者を得てください。あとは、地域団体との連携をしてくださいということで、取り組みとしましては、公民館やサポセン、書いてあるとおりなんですけれども、パンフレット、これは一番最後だけの活動になってしまったんですが、パンフレットを置かせていただきました。そこから、今回の活動については直接の申し込みはなかったんですが、公民館のほうから、トライの活動、おもしろそうだなということで、実は公民館に石窯があるんですけれども、トライとして活動をサポートしてもらえないかというお話をいただいておりますので、次につながったかなという気はしております。

あとは、私、青少年指導員もやっております。そういったところで、地域の方、ほかの地域の方にもこういった活動をお話ししながら、協力、アドバイスをいただくような形をとりました。賛同者の拡大ということです。

活動計画。5月、11月、ドッジボール大会をやりますというふうに計画を立てておりました。電子工作などということで、6、8、11、12。木工教室、夏休みに毎年。ほかの地域では子ども会などが主催しておるんですが、私のいる地域では子ども会がすごく少なくなりまして、実際、運営が回らないと。トライの活動もそもそもそういったところから始まって、子ども会でできないので誰かやってくれないかというような形で夏休みのイベント。野外活動として10月にバーベキュー。

先ほど出ました木工教室ということで、左側の絵が木工。お決まりのというか、右側がタイル細工。これは土建組合さんにご指導いただきながら、我々スタッフが運営してやっております。

ドッジボール大会。これは、我々。あと、保護者はアドバイスの形に回りまして、6年生に準備体操をやらせてもらって、指導してもらって、終わったらみんなで片づけると

いう形をとっております。

電子工作教室。予算、今回の物品で買わせていただきました材料をいろいろ使いました、こういった電気の動き、流れというものを、1回は松林公民館、もう一回は自治会館で行いました。

里山公園でこのような活動を行いましたということでございます。

ちょっと時間が足りなくて申しわけございません。ありがとうございました。

○中川副委員長

ご苦労さまです。こちらのずっと続けていられる活動にげんき基金を活用されて、今年度もどうにかやっていたらっしゃるんですか。

○亀田（トライ）

30年度は、今までの活動からちょっと勉強の時間にしようということで、げんき基金を申請しての活動ではなく、木工教室をちょこちょこした活動のみ。のみという言い方は変ですけれども、げんき基金を使わない活動でやっていきます。

○中川副委員長

電子工作教室が参加者が少なめですけれども。

○亀田（トライ）

そうですね。うまく告知ができなかったのかなというふうに。ただ、一昨年のは、同じような形でハンダ付けというのをやりまして、1回で8名の参加があったので、今回は。

○伊藤委員

電子工作がわりとハイライトが当たっていたような気がして、今回、これだけ少ないのはとても驚きなんです、告知に問題があったということなんです、こういった問題があったんですか。時期が誤った。場所を誤った。何か。

○亀田（トライ）

1つが、今まで大体学校でやっていたんですけれども、木工教室の後に案内を出して。学校からお金を取る事業というのはなかなか全員にの案内は難しいというお話がありましたので、去年、参加された方に個別であったり。

○伊藤委員

ということは、解決が難しいということですね。会費を取っている限りにおいて。

○亀田（トライ）

今の時点ではそうですね。適正な会費であればいいようなんですが、多分明確じゃない。

○伊藤委員

以前は僕は電子工作のほうに目を奪われていて、ドッジボールのことをよく考えなかったんですが、私の子どもころは、ドッジボールというのは、昼休みであるとか、休み時間であるとか、外で年がら年中やっていたけれども、今はそういう環境がないんですか。なぜなのでしょう。

○亀田（トライ）

以前から人気のスポーツなんですね。私も、今、息子は中学生になっていますけれども、たまに学校の横を日中通ると、昼休みとか休み時間にやっているということ。ただ、体育館をこのように借りると、違う学年、違うクラス、その子たちが来れるということのようで、非常に人気がある。

○伊藤委員

要するに、今の学校では、学校の教育のクラスの一環としてやっている。自由に子どもたちが戦い合うということがなくなっちゃうということなんですか。

○亀田（トライ）

昼休みはやっているようですけども、違う学年はやらないと思うんですね。学校の中では。今回、私が学校で借りているのは、違う学年とやります。1～2年生を2つに分けたりですとか、3～4年生。高学年になると、おとしやったんですけども、5～6年生と親、むちゃくちゃ楽しいようです。なので、そういった借りる場を我々トライが、トライの名前で学校を借りようというふうに考えてやっておりました。

○伊藤委員

学校では期待できない。子ども会では多少やっているけれども、子ども会自身がなくなってしまったので、こういうことをやらないといけないという現況なんですか。

○亀田（トライ）

そうです。例えば子ども会、今まで大きなところであれば、体育館を借りるんですけども、じゃ、今、誰が体育館を借りる手配をしてくれるのというと、小学校のごく一部の子ども会。皆さん、会長、副会長、いろいろ大変だということなので、なかなかそ

こまで活動が手が回らないということが実態のようです。なので、げんき基金はいただきませんけれども、ドッジボール大会であれば、私も案内を少し配ったりぐらいでしたらできますし、ほかの木工教室も皆さん期待されているので、このあたりはことしも続けていきます。

○伊藤委員

何とか学校内でできるようとか、ほかの団体ができるような仕掛けをつくれたらばいいわけですね。

○亀田（トライ）

そうです。

○中川副委員長

せっかく道具があるんですから。

○亀田（トライ）

はい。あと、公民館にもお話ししたんですけども、子ども会みたいに団体には貸せる。私の場合、トライという団体はあるんですが、会員というのは大人、運営者だけなんです。要するに、子どもたちもこの団体というのであれば、あまり気にせず貸せるんですけども、この前、公民館でやったのは、実費ぐらいだったらいいかなというふうに判断されて、いろいろ公民館、施設のほうでも悩まれたようです。

○三觜委員

子ども会というか、そういう母体がないわけですから、うまく推進協とか、体育振興会とか、何かを使って、子どもの部分だけをそっちに引き寄せるような方法を考えられたら、もう少し集まるとか。人集めの方法が大変だなと、これを見て思いました。子ども会なんかがあれば、ある程度参加人数は、実は、あれば、そっちでやっちゃっているかもわからないんですけども。

○亀田（トライ）

そうですね。確かに。ある程度あれば、私も子ども会の会長とかに何人か声をかければ、そこから広がっていくというのが期待できるんですけども、確かに難しさを、ここ2年、3年、続けてみて、一筋縄では解決しない問題というふうに感じております。ただ、誰かがやれば、ドッジボールのように、皆さん参加してすごく乗ってくるので、できる範囲では続けていこうかというふうに考えております。

○秦野委員

あとは、聞いていて思ったのは、ドッジボールのときは、もしかしたらたくさん子どもたちが参加しやすい状態だと思うので、例えば、そのときに、次回の電子工作の開催日を決めておいて、そのときに告知をするということがもし可能であれば、そういったことをされて。

○亀田（トライ）

この前、実は日程は、日にちと場所はしました。ただ、プリントみたいなので持って帰ってもらえばよかったのかなというふうには感じます。そこまで具体的じゃなかったので、あと、学校という施設でどこまでそういった案内を配れるのかなというのが、学校側と調節をつけていなかったものですから。

○秦野委員

次回、ぜひそこは学校のほうにも。

○亀田（トライ）

そういったもので考えていきたいと思います。

○秦野委員

そのぐらいであれば、もしかしたら、その場でお金を取らなければ、活動のPRという意味で学校にも協力いただけるかもしれないですからね。

○亀田（トライ）

ただ、その中で1つ、地域でいろいろ、野球の団体とかサッカーの団体が、学校内では案内を配れないんですね。みんな校門の外で入学書を配っていて、なんでトライだけ配れるんだということもちょっと心配されている。ただ、私の場合は、その都度、誰でもいいからということで、今まで配れたときは、校長先生、学校関係者のご判断でご協力をいただけたという。

○中川副委員長

ありがとうございました。よろしくどうぞまた今後とも。

○亀田（トライ）

ありがとうございました。（拍手）

○中川副委員長

それでは、これでBグループはこの案件で終了しました。

委員長署名 大江 守之 _____

委員署名 秦野 拓也 _____